

## 縁―甚四郎と長者の娘―

鈴木 研二

### はじめに

女心はキツネで象徴される。―これが「狐女房」を心理学的に解釈した結論であった。<sup>\*1</sup> 女性是一般に、男女関係・人間関係、さらには人生の流れや変化に、高度なセンサ―が働く。その感度たるや、なみの男性の比ではない。しかも、女性キツネのごとく自身も化ける。他を化かす。計算高くしてズルくも立回れる。

男性はとてまかなわれない。彼女らから見たら、男心はサルに例えられようか。実際に日本には「猿聲入り」という昔話もある。男はサルのように卑俗で、あからさまな欲望（食欲・性欲・権力欲・名誉欲……）に突き動かされ、図々しくてセコくて汚い。他人の気持もろくに読ま（め）ない。せいぜい猿のような子どもっぽさ、純真さが救いであろうか。

だから、女性が男性を評して、「男はなんて単純なんだろう」と口にするのを時々耳にする。私の祖母も母も言っていた。隣の奥さんも道を行く女子学生のグループも……。単純だけならまだしも、野蠻、バカ、幼稚……までつくこともある。

対人認知能力にこれだけ差がある状態で、野蠻と暴力を封じられた

ら、どんな男性でも女性の掌で転がされるより仕方があるまい。だからといって、野蠻と暴力で、女と男が互いを尊重するような関係ができるとは、考えられない。

ところで。猿は民俗学的には神の使いとされる。しかも、稲荷神社に見られるように、狐も神の使いである。これら神の使い同士が、どうしたら互いに尊重し合いながら、コントロールも支配もせず、対等にやっていけるのだろうか。

そこを探るのが小論の課題である。

### かぶ焼き甚四郎

―岩手県上閉伊郡―

むかし、あるところにかぶばかり焼いて食っている若者がありました。村の若者たちが、甚四郎に嫁をもらってやろうといつて、大ぜいでこだし（葛で編んだ籠）をさげて近所の朝日長者の家の前を、ぞろぞろと通りました。長者どのはこれを見てふしぎに思つて、「お前たちは、何をするんだい」と、たずねました。若者たちは、「か

ぶ焼き甚四郎のすぼみ（櫛の実）とり、すぼみとり」といいながら、通りすぎました。こんどは鋤をかついだ人たちが、長者どのの家の前を大ぜい通りました。長者どのが出て来て、またたずねました。若者たちは、「かぶ焼き甚四郎のお田打ち、お田うち」といつて、行つてしまいました。「かぶ焼き甚四郎というのは聞いたこともない名だが、あのすぼみとりといい、今のお田打ちといい、たいしたもんだなあ。できることなら家の娘を、あんなところへやりたいたいんだ」と、長者どのの思っていました。

あるとき、朝日長者どののところへ、嫁もらいが来ました。かぶ焼き甚四郎のところから貰いに来たというので、すぐ話がきまりました。それからいろいろな道具をもつて、長者の娘は嫁入りしました。ところが、甚四郎の家へ行つてみると、小さなきたたない掘立小屋のような家でした。家には何にもないので、若者たちが屏風だの、鍋だの釜だのもつて来て貸してやり、ぶじにご祝儀をすましました。けれどもつぎの日になると、たたみも屏風も鍋も茶碗も、のこらずもつて帰りました。お嫁さんは気が気ではありませんでしたが、甚四郎は少しも気にかけるようすもなく、平気な顔をしておりました。

飯を炊こうとしましたが、お米は一粒もありませんでした。けれども甚四郎は、「飯はいらないよ」といつて、いつものようにかぶを焼いて食べましたが、お嫁さんはとても食べられませんでした。仕方なく家からもつて来た絹の反物を三反だして、「これ売つて、お米を買つて来て下さいよ」といつて、甚四郎を町へやりました。甚四郎は途中で物売りにたたとられて、何にも買わないでもどつて来ました。つぎの日も町へ米を買いに行きましたが、その日もやはり手ぶらで帰りました。

三日目にやつと絹の反物売つて銭をとりましたが、途中で子供たちが鷹を捕えていじめていたので、甚四郎は反物売つた金で子供たちから鷹を買いとりました。甚四郎はたいそう喜んで、

ひつくとく

さつくとく

ぴーろろ

といつて、鷹を飛ばせて遊んでいました。それから田圃に降りて行くと、そこに河童が遊んでいました。これをみて鷹はすぐに飛びかかつて行きました。すると河童が、「宝物をやるから、はなしてけろ」というので、甚四郎は河童をゆるしてやりました。すると河童は延命小槌と延命小袋という宝物をくれました。けれども甚四郎は、「袋の方だとかぶを入れるにええが、槌は何にもならないなあ」といつて、捨てて家に帰りました。

女房は米を買つて来るのを待ちあぐんでいましたが、その日もまた何にも買わないで帰りましたので、すっかりあきれ返つてしまいました。甚四郎は米のことなど忘れて、その日のことを残らず語つて聞かせました。「その袋というのが、これだよ」といつて、見せました。さすがは長者どのの娘です。「これも宝物にはちがいありませんが、小槌と二つないとだめですよ」といつて、甚四郎がすてて来た小槌をひろいに行きました。そうして小槌を拾つて家に帰りました。それから、こんな家では困るから、延命小槌ですぐに大きなりっぱな家を建てました。甚四郎はこれを見て、大へん調法なものが手に入つたと思つて「こいつはおもしろい。おれもやつてみよう」といいました。すると、女房は「そんじや、米と倉とを出しましょう」といつて、小槌の打ち方を教えました。甚四郎は教えられた通りに、「こめくら出はれ」といつて、槌をふりました。ところが、

少し早口にいったもので、たくさんの「小盲」が出て来ました。女房はこれにはおどろいて、またやりなりました。こんどは望み通りの「米と倉」とが出て来ました。

ある日、家ぶるまいをするからといって、両親のところへ使いを出しました。親たちはたいそうよろこんで、すぐにやって来ました。来てみてたまげてしまいました。そのうちにご馳走が出来ました。そのりっぱなのに、またおどろきました。そうしてご馳走がすむと、お膳もお碗ものこらず川に流してしまいました。両親はご馳走もおわりましたので、帰ることになりました。すると、娘は「朝日長者どのお帰りだ。明かるくしてやれ」といって、家に火をつけました。家は親たちが帰りつくまで、明かるく燃えていました。

それからしばらくたって、長者どのは先ごろよばれたお礼返しをするために、甚四郎夫婦をまねいてご馳走をしました。ご馳走がすんだ後で、お膳やお碗を流してしまうとあとがなくなるので、流すようなふりをしてみせました。それから二人が帰るときに、長者どのもまた家に火をつけて、明かるくして送りました。甚四郎の家はすぐあとにりっぱな家がたちましたが、長者どのは家を建てることにできないで、小さな小屋に入っており\*<sub>3</sub>ました。甚四郎は気のどくに思っ、りっぱな家をたててやりました。

### サル芝居とキツネの嫁入り

この昔話には納得したい、不可解な箇所がいくつかある。主人公がかぶばかり焼いて食っている点はおくとしても、冒頭の嫁もらいからして破天荒である。まるでサル芝居。朝日長者は近所に住んでいるらしいのに、甚四郎のことを知らないかのである。

嫁もまた、掘立小屋のような家に家財道具もなく、米すらないと知った時、よく実家に戻らなかったものだ、と思われる。甚四郎の住居を一目見ただけで、おおよその見当はついたであろうに。しかも彼女は、昔話の後半、河童の宝物やその使用法に関する知識からして、決して無知蒙昧な女性ではない。家ぶるまいでの両親に対する態度からすると、度胸のすわった、しっかりした女性なのである。

その彼女がなぜ唯々諸々と嫁入りしたのだろうか。しかも類話では、嫁入りに付いていったお伴の者や娘の親が、「帰ろう」とか「娘を棄てるようなものだ」と口にするのだが（香川県三豊郡志々島、青森県八戸市）、彼女が帰ろうとしないのである\*<sub>3</sub>。

まさに「キツネの嫁入り」である。この言葉はもととが天気雨のことを指すのだが、長者の娘のすることも、天気雨のようにチグハグである。状況をとらえるのに敏感なはずの女性が、何を考えて、甚四郎と村の若者たちの、すぐにでもバレそうな芝居にのったのか。不可解である。

しかしともあれ、長者の娘は甚四郎（たち）のサル芝居に、キツネの嫁入りで応じた。これが始まりである。

さらに―。この話の不可解さは冒頭のエピソードに止まらない。甚四郎が河童から宝物を手に入れる経緯。なぜこうなるのか。さらに、河童の宝の小槌を捨てて、後で嫁が拾ってきたことに關しても、甚四郎に都合がよいといえば、あまりにも都合よくできている。

それに加えて、家ぶるまい。今度は女房がお膳やお碗を流す。果ては家にまで火をつけて燃やしてしまう。一体何をしているのだろうか？ 甚四郎も変った男だが、長者の娘も尋常ではない。しかし、二人は互いを責めない。責めないどころか、どこかでわかり合っている風情

がある。

私は、この昔話の分析と解釈を、以上のような不可解さに注目するところから始めたい。

### 膳や椀を流すこと・家を燃やすこと

比較的解釈しやすいのは、最後の部分、女房のとった行動であろうか。

両親の朝日長者に、「どう？ これを見なさいよ！」という、示威行動の意味が一つあるだろう。娘夫婦の財力の誇示である。それで對抗するかのように、後で朝日長者も膳や椀を流すふりをしてみせる。実際に家に火をつけてもいる。娘と両親はこうして互いに張り合っている。

しかし、この行動の意味は財力の誇示だけに限定されないだろう。膳や椀を流してしまえば、今まで通りの食事はできなくなる。この行為は、娘の、両親に対する今までのような口唇期的依存からの脱却をも、象徴するのであろう。膳で食べるお嬢さまからも、親に食べさせてもらう子どもの暮しからも、脱却するのである。つまり、「もうあなた方には、今までのようには甘えません／甘える必要がありません」と宣言しているのである。

家を燃やすことと合せて、以前の食器や家の状態には戻らないという、娘の不退転の決意と受けとれる。彼女はもはや朝日長者の娘ではなく、一人の自立した女性だと言いたいのであろう。

さらに、家を燃やすことには次のような意味も考えられる。家は、彼女のふだんのこころの状態を象徴する。火は燃えるような激しい感情の象徴である。怒り、恋、喜び。怒りはこの場合除くとして、火は

甚四郎に対する恋愛感情であろうか。あるいは、結婚して自分の生活を確立したという、彼女の喜びかもしれない。

家をすっかり燃やしてしまうことは、そのように自分の人生を完全燃焼させたいという、彼女の願望の表れとも見られる。

長者の娘はそういうふうな人生を生きたかった／生きたいたのであろう。――自立／自律。人生の完全燃焼。それが達成できた／できそうな確信が、食器流しと家を燃やすことに表現されている、と考えられる。私は冒頭、男女を動物に見立てると、女性キツネであろうと書いた。鋭いセンサーをもっていて、自分が男と別れたい場合でも、それを相手に切りださせるような知恵者である。この昔話を讀むと、長者の娘はふつうの女性以上の知恵者であることがわかる。ところがその彼女が、自ら家を燃やしている。これは両親にあてられた行為であるが、甚四郎や自分に向けられた、恋や喜びの告白でもあろう。

賢く計算高いはずの女性に、ここまで分別を超えた振舞いをさせるとは……。どうやら甚四郎は並の男ではない。動物に例えれば、彼はややもするとアホなサルに見えるけれど、実は、大物ギツネと対等に立合うことのできる大ダヌキなのではないか。

そしてここに、彼女（Ⅱキツネ）と彼（Ⅱサル）がうまくやっていく秘密が隠れているらしい、と想像されるのである。

### 甚四郎のもつ何か

前節の女房の行動（膳と椀を流すこと・家を燃やすこと）を除いて陽に支えていたのは、甚四郎がとってきた河童の宝物である。これらが手にはいったから、彼女は強気になった。自信ももったことであろう。では――河童の宝物が象徴するのは何だろうか。そして昔話による

と、それを手に入れてきたのは甚四郎であつたが、長者の娘の方がはるか以前からその知識をもっていたようである。これは一体何を意味するのだろうか。

ここで一つ作業仮説を立ててみたい。

長者の娘はいつ頃から、アホザルのような甚四郎が大物に化けるかもしれないことを、直感したのだろうか。実はこの種の直感は、世間ではさほど珍しいことでもない。村の若者たちも、いくらからかいかい気味かもしれないが、甚四郎が何かをもっているように感じたからこそ、長者の娘を世話したのであろう。何かなどとはかすこともない。長者の娘は、自分が手に入れた自立／自律を甚四郎がすでに体現していることを、見てとっていたはずである。男性を足がかりにして親からの自立を図るというのは、しばしば女性が用いる手段である。掘立小屋でかぶばかり焼いて食つてはいても、彼は自力で生きている男である。

だが、それだけとは思えない。

『日本昔話大成』によれば、この話は「蕪焼長者」という話型に分類される。青森県の類話に当たると、両親が死ぬ時に、「米を食おうとすると苦労するから蕪を食つて生活せよ」と主人公に教えたという<sup>4</sup>。つまり、甚四郎のかぶと掘立小屋は、生活のために割くエネルギーや苦勞を最小限に抑えようという態度の表れ、と見ることができる。

当然、余ったエネルギーは甚四郎のころころ（無意識）へと向う。彼は見かけや生活が質素な分、ころころは豊かさで満たされていると思われる。甚四郎のそこにある何かが、村の若者たちや長者の娘を引きつけたのではないか。——これが仮説である。

ところで、この何かは手で触れられないし、誰でもわかる言葉にもなりにくい。甚四郎は、そういう何かを感じさせる人物として、鋭い

センサーをもつ人たちの眼に映っていたのだろう。

そこで——その何か、田んぼで遊んでいる河童の宝物として表象された、と見てみるのだ。

これでいくつかの不可解さが解消し、全体のつじつまが合うならば、この仮説は有望な解釈になる。

長者の娘がいつから甚四郎のそこを嗅ぎつけたのか、彼女に訊いてみないとわからない。もしかすると、彼女自身もそれを自覚していなかったかもしれない。

### 絹の反物

さて、ことの始まりは米である。生きるために米が必要だという点で、長者の娘はふつうの人であつた。そこで甚四郎は、米を手に入れる算段をすることになる。まず生活である。これが結婚した男女の辿るふつうの途である。

嫁は反物を三反、甚四郎に渡す。甚四郎が結婚に期待していたのは、何よりもこの絹の反物だったのだろう、と私は思う。それというのは、絹は軽く暖かく身体を包む。売れば高価である。つまり絹は、人をそっと、暖かく包む理解力や受容力と、高い金銭価値（＝エネルギー）を象徴する。

この昔話では村の若者たちが代弁しているが、類話を読むと、主人公の何人かは自らが長者の娘を結婚相手に望んでいる。娘がきれいだからとか、やさしいからとか、第一の理由ではない。長者の娘だからである。

長者とは、村の人格者であり、知識人であり、あるいは政治的リーダーであり、財産家という。その娘なら、優れた人柄や知識、権力や



エネルギーに、生れも環境も一番近いところで育っている。そのことを象徴するのが絹の反物であろう。

長者の娘が甚四郎の何かに引かれたのだとすれば、甚四郎は甚四郎で娘の理解力やエネルギー、詳しくは、男性のもつ優れた何かを鋭敏にわかる女性が、当の男性に与えることのできる莫大なエネルギー、に引かれていたと考えられる。

ちなみに、どの類話の甚四郎もまた、美男子だとか善良だとは書かれていない。だから二人が、互いのどこに引かれ合ったのか、なぜ引かれ合ったのか、傍目にははなはだわかりにくいのである。

ここで、まずは、甚四郎が結婚を通して手に入れたかったのは、長者の娘がもっている絹の反物のようなところだったのだろう、とっておく。

### 子供たちと鷹

長者の娘から甚四郎に渡された絹は、銭（＝エネルギー）に替えられ、次に子供たちと鷹に回る。子どもたちはエネルギーをもらい、鷹は自由を得る。

この辺り、三という数字が目につく。（絹の反物三反、三日目によるやく銭）。夢や昔話では、動きや変化が起る際に三という数字が出現しやすいことが、経験的に知られている。エネルギーが甚四郎のころを巡りだし、新たな動きが始まるのであろう。

子供たちは、甚四郎の子どもっぽいころであらうか。それは彼自身であり、彼の純粹さや感情、そして創造性などを象徴していると考えられる。子どもが複数形で登場するのは、その部分の割合が多いことを意味するのか。あるいは、まとまりがとれていないことを意味す

るのであろうか。

そこに鷹が捕えられていた。これは、甚四郎の動物性が自由でなかったことを象徴するのであろう。なるほど、昔話を読んでも、甚四郎は動物の活気に満ち溢れた若者には見えない。かぶばかり焼いて食べているエピソードからしても、彼は現代という草食男子だったのかもしれない。

その辺りが長者の娘との結婚によって変動する。解放され、自由で活動的になった鷹は、田んぼで遊んでいる河童を見つけ、たちまち飛びかかる。鷹は、甚四郎のころの奥に潜んでいた、肉食系の動物性であらう。それは鷹のように、鳥瞰的で抜け目ない視野をも備えているらしい。――この鷹がまず、甚四郎のただ者でない何かかもしれない。

嫁の尽力もあるが、この変化を予感して結婚に臨んだのは、もともと甚四郎（の鷹）だったのだろう。

### 河童の宝物

河童の遊び場所が興味深い。田圃。田んぼは水と大地が接触し、混ざり合い、穀物を生産する場所である。生命や無意識を象徴する水と、現実や意識を象徴し、植物や動物を育む母なる大地。その二者が交流し、新しいものごとを産み出す場が田んぼである。

河童や蛙は、水と大地の両方を往き来する生きものとして知られている。今のところは遊んでいるようだが、この河童がうまく機能すれば、甚四郎は無意識と意識を股にかけ、創造的／生産的な男になるだろう。

その秘訣を示すのが河童の宝物か、と見られる。

そこで、延命小槌と延命小袋である。S・フロイトをもちだすまでもなく、男女の性器を連想させる象徴に、延命えめいという修飾語がついている。この宝物は、新しい生命を産みだし、寿命を延ばす働きがある、というのであろう。

昔話はまた、宝物という言葉によって、これこそ甚四郎の最高の何かである、といたいのであろう。延命小槌は男性性器や鷹にも似て、エネルギーと自由を与えられれば創造的に働く何かであろう。延命小袋は、女性性器や絹の反物とも重なり、人を暖かく包みこむような受容的な力であろうか。さらにこれには、小槌にエネルギーを与える働きもある。加えて、小槌の価値をいち早く嗅ぎつける、高度なセンサーをも備えている。

創造的な力（Ⅱ延命小槌）と、感じとりわかる力（Ⅱ延命小袋）。二つの宝物は、水と大地すなわち無意識と意識が接する場では、甚四郎と長者の娘のように、「二つないとかめな宝」なのだ考えられる。

念の入ったことに、河童の説明だけでは、甚四郎には二つの宝物の意味がピンとこなかったらしい。彼は小槌を捨てて帰ってくる。そこをしっかりと理解しているのは、高度なセンサーと理解力（Ⅱ延命小袋）を有する長者の娘なのである。——ここでも、二人いないとかめなのだ。ある時、私は講演で「かぶ焼き甚四郎」について話したことがある。参加者の若い女性が、「甚四郎って、今の時代だとミュージシャンかお笑い芸人みたい」と発言した。なるほど、と思った。たしかにミュージシャンもお笑い芸人も、無意識と意識の狭間で、創造的な仕事をす。まだ売れていないその卵たちを見て、彼や彼女のもつ何かをいち早く嗅ぎあてるのは、質の高い小袋をもった、長者の娘のような人たちなのであろう。

そうなると、ことはミュージシャンやお笑い芸人だけに限らない。

画家にしても作家にしても、芸術家は理解者を必要とする。学者にしても研究者にしても、あるいはアスリートやシャーマンや宗教家にしても、一般に無意識と意識を往き来して仕事をする人々は、延命小槌だけでなく、延命小袋も必要である。

それが、甚四郎（の鷹）がやってみせたように、無意識と意識の接触する田んぼに飛び込んでいって、そこから宝物をとってくる力（創造性Ⅱ延命小槌）であり、また、長者の娘がやったように、小槌の何かを感じとり、その価値を認め、それにエネルギーを与え、成果を喜ぶ力（感受性・受容性Ⅱ延命小袋）なのである。

これらは一つひとつが宝物にはちがいない。が、一つだけであつても、結婚前の甚四郎や長者の娘のように、その一つが遊んでしまうこともある。二つそろわないと、いい仕事に結びつかないらしい。

子どもつばさとの関連といい、創造性といい、延命小槌はどうやら、サルの小児性がもつ最良の能力を象徴しているようだ。そして、態度の優れたセンサーというキツネの資質の、最良の部分を象徴するのが延命小袋という宝物、と考えられる。

これらをサルの徳（Ⅱ小槌）、キツネの徳（Ⅱ小袋）と言い換えることもできよう。徳を養い、徳を発揮するとは、個人の最良の天性や資質を伸ばし、それを生かすことにほかならない。すると、延命という修飾語の由来は、それらが田んぼの生産性を高め、めぐりめぐって個人や共同体、ひいては人類の寿命を延ばすことにつながる、というのだろう。

## サル芝居とキツネの嫁入り（再考）

ところで、小袋と小槌は、この昔話が物語るように、一部の人の眼にしか映らない。多くの人は、たとえ甚四郎が何かをもっていると感じても、それがどういふことなのか追究しないし、よくわからない。また、甚四郎が家に帰る途中で延命小槌を捨ててきても、誰も拾わない。大方は見えないし、たとえ見えても取つていける代物ではない。だから、それを見つけて家にもち帰つた女房は特別な人である。延命小袋をもつていて、それを使いこなす人でないと、こうはいかない。人間のこころの、この見えない辺りのものごとは、客観にも主観にも映らない。

客観的に察知できるのは、貧乏な若者と長者の娘が、サル芝居とキツネの嫁入りのような奇妙なやりとりを経て、結婚した。さらに、なぜか暮しがうまくいつているらしい、ということであろう。

人の主観に映ることは、次のようであろうか。サル芝居はある意味で茶番かもしれないが、甚四郎という若者の存在と、長者の娘との結婚に積極的な彼の意欲を、彼女に伝えるうえで効果があつた。さらに、彼女のキツネの嫁入りは、彼女と彼をとりまく諸事情から見るとバラバラでチグハグな決断に映るが、彼女の方にも応じる意欲があるという一点を、甚四郎にはつきり伝えた。

彼と彼女は互いにその気になった（「情が通じた」）のである。

だが、何が互いを引きつけ合つたのか。それは客観的にも主観的にもよくわからない。果して当人たちは自分でわかつていたのか。それもわからない。甚四郎は金や財産をほしがる男でもなさそうだ。その彼が長者の娘を嫁に望んだということは、彼女のエネルギーが知識か人格か、あるいはそれら全部に期待するところがあつたのか、と推

測するまではできよう。が、それらが絹の反物や延命小袋に具現化されているという気づきが、当の甚四郎にどのくらいあつたのだろうか。

むしろ、自分（ら）のサル芝居に彼女がキツネの嫁入りで応じてきたという事実が、彼には印象深かつたことだろう。なぜならそれこそ、彼女が甚四郎の何かを認めているという、まぎれもない証拠であつたから。

彼女のキツネの嫁入りが、彼の確信とエネルギーをいやがおうでも高めたことは、疑いない。

長者の娘にしても、事情は似たりよつたりであつたろう。（甚四郎は何かもつていそうだ）という漠然とした思いは、ある時点からあつたにちがいない。が、それは何なのか。彼女の親にも客観的に見せられないし、主観的な言葉でもその思いを表現できたかどうか。私の経験からすると、たとえ彼女が言つたにしても、周りからはたわごとにしかならなかつたかもしれない。

このように、何が互いを引きつけ合つたかということは、客観的にも主観的にも、よく見えない。こうした、こころの（見えない辺り）のものごとは、前もつて客観や主観で理解しようとするよりも、昔話のように、物語の展開を俟つて結果から考える方が、まだわかりやすい。あるいは、客観や主観の働きを止めて、《第三の眼》で予測する手もある。しかし、それは占いにも似て、「当るも八卦、当らぬも八卦」になりがちである\*。

彼女が甚四郎のもつ何かに対する確信と言葉を得たのは、彼が河童の宝物をもつて帰つた時だつたと思われる。そして、朝日長者夫妻を呼んで、家ぶるまいをした際の食器流しと火事の一件あたりで、ようやく、甚四郎の何かだけでなく、その何かに対する彼女の直感にも、確信がもてていたのだろう。（しかも、食器流しと火事の演出では、彼



女が創造的であつた。ここでは女房が、自分の延命小槌をはでに使っているのである)

そういう流れの中で、彼女のあのような振舞いがでたのだ、と私は想像する。

延命小槌と延命小袋は、他人もともかく自分においても、なかなかうまく認識できない宝物なのである。

## 縁

〈見えない辺り〉のことは、うまく言葉にならない。たとえば言葉になつたにしても、それが何を意味するのか知らないまま、言葉が独り歩きする場合もある。たとえば、この河童の宝物の一件である。〈本当の自分〉とか〈神〉や〈仏〉、さらには〈縁〉や〈運命〉なども、そうした一種であろうか。

われわれはこうした言葉が意味することを、実は全く知らないわけではない。たが、はっきりわかつていないのでもない。文化によつて、無心とか無意識とか深層心理と言葉は違うが、これがこころの深層、〈見えない辺り〉のもののことのありようである。

延命小槌と延命小袋の場合は、さらに興味深いことがある。この二つには、特別なつながりがある。一つづつが宝物であるうえに、「二つないため」な組合せでもあるのだ。

この「二つないため」が意味することは、多重的である。実例がここにあげた昔話なのだが、多重性のわかりやすい所を、少し取りあげておく。たとえば、創造性を象徴する小槌は、多量のエネルギーや他者の理解を求める。それを与えてくれるのが、高度なセンサーと受容性を象徴する小袋である。

小槌は小袋なしには、男女の性器と同じように、生産性を発揮できない。

他方で、小袋も小槌がないと本領を発揮できない。評論家やプロデューサーや聴き手ばかりがいても、作曲家や演奏者がいなければ音楽にはならない。音楽ができなければ、評論家もプロデューサーも、生活すら成り立たない。

これら小槌と小袋は、しかも、対等な関係にある。どちらが主でどちらが従というのはない。互いに依存し合うが、それは上下の関係ではない。

小槌と小袋は、自立／自律した者同士の、協力あるいは相互依存の関係にある。しかも。同時にそれらは、一人の人間の中に両方が存在している。

かくして長者の娘は、甚四郎との出会いにより、彼女の延命小袋を完全燃焼させる機会に恵まれた。それだけではない。両親や夫から自立／自律した女性として、自分の生き方を確立したのである。おそらく世間は、「かぶ焼き長者の家は奥さんでもっている」と噂したことだろう。

甚四郎は長者の娘の助けで小槌と小袋を見つけ、それらを使いこなすようになった。二人の生活は経済的にも安定した。

彼も、そして彼女も、こうして自己実現の道を一歩進めたのである。

これらの動きの根底にあつたのが、甚四郎のもつ何か(延命小槌・延命小袋)と長寿あひの娘の何か(延命小袋・延命小槌)、および両者の感応やつながり、引きつけ合い、だったのだらうと考えられる。

二つの宝物のこうした関係性も、こころの〈見えない辺り〉に属している。見えないのだが、それにつながれた両者は、なぜかわからないうまに感応し、引きつけ合う。これを縁とか、「運命の赤い糸」と

呼ぶのであろう。

河童の宝物には、こうして二つがある。しかもそれらは二つないのだめな、特殊な関係性をもつ宝物である。女性はその一つに優れている。だとすれば、男性が女性と対等に尊重し合う関係を築くには、延命小槌（「サル」の徳）を磨けばよい。そして、それにふさわしいキツネの徳をもった女性に、気づいてもらうことである。

これが「かぶ焼き甚四郎」のメッセージであろう。

しかし―。〈見えないうち〉のものごとだけに、河童の宝物やそれらをめぐる関係性には問題もある。その一つは、適切な言葉が見つからないことから発する。

たとえば、甚四郎夫妻に子どもが生まれ、父親が幼い子を風呂に入れているとしよう。ある時、子どもにこう訊かれる。

「お父さん、どうしてお母さんと結婚したの？」

甚四郎がなんと答えるか。

（うつ）と言葉に詰ったら、それは縁と言いたいのかもしれない。小さい子どもに「縁」といっても、「エンてなに？」と訊き返されるのがおちである。私自身の経験を述べると、私はこういう時に適切な言葉を見出せなかった。すると、妻との関係が気まづくなる。人に聞いた話だが、とつさに「シカタナカッタ」と子どもに言った男性もいるらしい。子どもから伝わったのだろう、それを彼の奥さんから聞いたことがある。

縁とは時にシカタナイコトかもしれない。

さらにもう一つの問題。甚四郎は米と倉をだそうとして、小槌で小盲をだした。その宝物の小槌も、一度は捨ててきた。絹の反物を銭に替えるのも、二度失敗した。甚四郎には失敗が目立つ。長者の娘を一

度で射止めたのは、おそらく例外中の例外であろうか。

私は、小槌にはもともと失敗がついて回るのではないか、と思う。なぜなら、創造性という小槌は、子どものころからのつながりが強い。それは、現実を見るおとなの眼を半眼にしておかないと、うまく働かない。つまり、子どものころ―延命小槌という組合せには、現実をしっかりとらえにくい、半眼・小盲なところが伴っている。

だからどうしても、失敗が多いのであろう。

公平を期すために、小袋の問題点も一つ添えておく。小槌に小盲なところがあるとすれば、小袋は小ズルイ。小袋は高度なセンサーで、〈見えないうち〉も現実もよく見る。見えているだけに、延命小袋は計算もする。時には小ズルイ人にもなるのである。

だが―。小盲も小ズルサも、異性の眼で見るとかわいいらしい。いや、その方が余計かわいく感じるというから、女と男は不思議である。

#### 〈註〉

\*1 鈴木研二「女心―狐と三郎兵衛」『茨城キリスト教大学カウングセリグ研究所紀要』三二号 二〇一五、所収

\*2 関敬吾編『こぶとり爺さん・かちかち山』岩波書店 一九五六、より引用。ただし、原則としてふり仮名は省略した。

\*3 関敬吾『日本昔話大成 2』角川書店 一九七八

\*4 同右

\*5 同右

\*6 鈴木研二「霊観の心理学」『茨城キリスト教大学カウングセリグ研究所紀要』三二号 三〇一六、所収

## Invisible Ties

Kenji Suzuki

**Abstract**

This paper presents depth psychological analyses and interpretations of “KABUYAKI JINSHIRŌ”, a Japanese folktale.

Generally speaking, men are not so sensitive as women about human relations nor changes of mind. Men are rather dull to them. In addition to that, women are disguised. They use artifice. Then, how do men get along with women? What is requested of a man to associate women friendly, on an equal footing, without control nor being controlled? It is the subject of this article.

The folktale produces “Treasures of KAPPA” on that matter. They are a pair of treasures, named EMEKOZUCHI (a little hammer) and EMEKOBUKURO (a little bag). I think they symbolize a solution of the difficulty which we seek.

EMEKOZUCHI symbolizes creativity, and EMEKOBUKURO dose highly sensitive acceptability. Moreover, it seems there are invisible ties between them.

Men had best cultivate their creativity, leaving the consequences to invisible ties.

